

描き手の動作からみた風景構成法描画時の「負荷」

武藤, 悠未
愛媛県福祉総合支援センター

佐々木, 玲仁
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/7343264>

出版情報：九州大学心理学研究. 26, pp.53-62, 2025-03-21. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



描き手の動作からみた風景構成法描画時の「負荷」

武藤 悠未 愛媛県福祉総合支援センター
佐々木玲仁 九州大学大学院人間環境学研究院

Analysis of the “Load” in the Landscape Montage Technique through Drawer Behavior Examination

Yumi Muto (*General Welfare Support Center, Ehime Prefecture*)

Reiji Sasaki (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

In this study, we investigated the “load” experienced by individuals during the Landscape Montage Technique (LMT) by analyzing their behavior while drawing. In a preliminary investigation, we developed a behavior classification index and focused on three key “drawing behaviors” directly related to the process: “line drawing,” “moving in the air,” and “stopping.” For the main investigation, we conducted the LMT with 13 participants and examined the time spent on each drawing behavior. In addition, we interviewed the participants about their experiences during the drawing process. The results indicated a relationship between items that required a high percentage of time to stop and items that the drawer found difficult. We interpreted line drawing as representing “work load,” moving in the air as representing “image representation load,” and stopping as representing “image production load.” We suggested the possibility of inferring the “load” experienced by the drawer based on their behaviors. This study showed that the “load” of the LMT is multilayered and its structure is not too burdensome for the drawers.

Key Words: Landscape Montage Technique, drawer’s behavior, drawing process, load of drawing

I 問題と目的

1. 風景構成法とは

風景構成法は、中井久夫によって1969年に創案された描画法で、日本の心理臨床場面で広く用いられている技法である。風景構成法では、見守り手に告げられた川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石の10のアイテムを、描き手が画用紙に順番に描き入れ、最終的にひとつの風景を完成させていく。皆藤（1994, pp.47-48）は、教示に従って風景を描いていくという風景構成法の一連の作業において、描き手の風景イメージが刻々と変化しながら構成されていくというプロセスがあることを指摘し、このプロセスは「風景構成法における最も独創的な特性であり、作品から描き手のメッセージを読み取ろうとする場合、必要不可欠の重要な視点であると考えられる」と述べている。また、佐々木（2006, p.187）は、「見守り手の発する言葉に添えてそれぞれのアイテムが描かれていくとき、そこで描き手がつぶやいた言葉やペンの運び、アイテム名が発せられたときの描き手の反応など、描かれていく様子自体が重要な『風景構成法の要素』となる」と論じている。このように、風景構成法については、その描画プロセスに着目することの重要性が指摘されてきた。

2. 風景構成法の描画プロセスと「負荷」

この風景構成法の描画プロセスに関する研究としては、佐々木（2012）、大場・佐々木（2015）、石原（2014）などが挙げられる。佐々木（2012）は、見守り手がアイテムを告げ、描き手がそのアイテムを描き終えるまでの時間を「描画時間」として抽出し、アイテムごとの描き手の描画時間の比較を行っている。佐々木（2012）は、描画時間の長さから描き手の「負荷」が反映されていると推測し、アイテムごとの「負荷」の推移から風景構成法のアイテムの提示順序の構造について考察している。また大場・佐々木（2015）は、佐々木（2012）の再検討として、アイテムの描画時間だけでなく「初発時間」と「線描時間」についても分析を行い、風景構成法の各アイテムの特徴について検討するとともに、風景構成法において初発時間や線描時間に描き手の個性が顕れる可能性を提示している。一方で石原（2014）は、描き手の脳活動データを計測することで生理的次元から描き手の「負荷」を捉え、描画プロセスを探る試みを行っている。石原（2014）はとくに最初のアイテムである川描画時の脳血液中の酸素化ヘモグロビン濃度（oxyHb濃度）と描き手の描画体験の関連性について考察を行い、oxyHb濃度に反映される「負荷」と、佐々木（2012）が指摘した描画時間の長短からみた「負荷」は異なる性質をもつのではないかという見解を示している。これらの研究においては、描画プロセスについての考察が描き手の「負荷」

との関連から行われており、描き手の「負荷」は、風景構成法の描画プロセスを論じるうえで重要な指標となっていることがうかがえる。

風景構成法描画時の「負荷」について佐々木（2012, p.124）は、「時間をかけて描く場合は、描くのに手間どっている場合と伸び伸びと描くことができたために時間がなかったという場合と両方が考えられる」としたうえで、「いずれの場合でも描くためにはエネルギーが必要であると考えられるため、これらをまとめて『負荷』として扱う」と述べている。また、石原（2014, p.246）は、「oxyHb 濃度変化は、風景構成法においては、アイテムを実際に描く作業にかかる負荷ではなく、指定されたアイテムをどのように描こうか考えたり、イメージしたりする際にかかる負荷をより反映するものであったと推察することができそうである」と論じている。このように、描画時の描き手の「負荷」にはいくつかの種類があることが示唆されているが、それらはこれまで明確に分類されずに論じられてきた。描画中の描き手の「負荷」について整理し、分類を行うことは、風景構成法の描画プロセス研究を行ううえで重要であると考えられる。

3. 描き手の行動に関する研究

一方、認知心理学や知覚心理学の分野においては、描画プロセスの研究として、描き手の映像データやアイトラッカーなどのデジタルツールを用いた調査が行われている。野中ら（2010, p.692）が指摘しているとおり、こうした描き手の「進行中の描画行動」に注目した研究では、従来の知覚実験や完成された絵画の知覚に関する研究では得られなかった新たな知見が提示され、描画中の描き手の行動に注目した研究を行うことの有効性が示されてきた。心理臨床場面での描画について近藤（2011, p.29）は、「筆線の逡巡や修正、伸びやかに動く線などには、描き手の活き活きとした力動が含まれている」と述べており、臨床心理学の分野においても描き手の行動観察から描画プロセスを検討することの意義が論じられている。しかし、描き手の行動に焦点を当てた心理臨床学的な研究は数少なく、こと風景構成法に関しては、描画プロセスをみることの重要性が論じられているにも関わらず、描き手の行動に着目した研究はごく少数にとどまっている。

風景構成法の描き手の行動に注目した研究として、長岡ら（2013）の報告が挙げられる。長岡ら（2013）は、風景構成法の各アイテムの描画終了後から次のアイテム描画までの描き手の行動を調べ、描き手の行動セットと、描き手と見守り手の関係性が成立していくプロセスとの関連について検討している。長岡ら（2013）の研究では、見守り手が「関係性が成立した」と評価した描き手について描画後に一貫した行動セットがみられ、こう

した描き手の行動が、二者の関係性成立の度合いを図るための指標となりうることが示唆された。しかし、この研究では、各アイテムの「描画後」の描き手の行動に主眼が置かれており、「描画中」の描き手の行動に焦点を当てた検討はなされていない。松下（2023, p.69）は、風景構成法が「この『言葉にならない次元』のものを表現するためのものである」と述べ、描画が表現されていくプロセスを丁寧にみていく必要があることを強調している。描画中の描き手の行動について詳細に観察し、分析することで、「言葉にならない次元」の心の動きを読み取るための手がかりが得られるのではないかと考える。人間の行動に関する研究においては、久保田（2006, p.199）や高橋（2012, p.3）が述べているように、「行動」は「動作」の組み合わせによって成り立っているとされている。このことをふまえると、風景を「描く」という描き手の行動は、いくつかの「動作」の連合によって構成されていると考えられる。近藤（2011）の指摘する「筆線の逡巡や修正、伸びやかに動く線」などの描画プロセスを明らかにするためには、「行動」よりもさらに細かな次元である描き手の「動作」について分析することが必要であると考えられる。描画中の描き手の動作に焦点を当て、データの収集・分析を行うことで、風景構成法の描画プロセスについて新たな知見を得られることが期待できる。

4. 描き手の「負荷」と動作の関連

以上より、風景構成法の描画プロセスの研究において、描き手の「負荷」に注目すること、また、描き手の動作から描画プロセスを見ていくことは重要であると考えられるが、こうした研究は十分に行われているとは言いがたい。とくに、描き手の「負荷」と描き手の動作の関連についての調査はこれまで行われておらず、検討を行う意義があると考えられる。これらのことから、本研究では、風景構成法描画時の描き手の動作を分析し、描き手の「負荷」について探索的に検討を行うことを目的とする。なお、描き手の「負荷」については、佐々木（2012, p.124）の定義に従い、描き手が「描くためにエネルギーを要している状態」を「負荷がかかっている状態」として扱うこととする。また、本研究では、描き手の「負荷」について多角的に捉えるために、描画中の体験について描き手にインタビューを実施し、描き手の動作と体験の両側面から検討を行う。

II 方法

1. 予備調査

本調査の前に、描き手の描画中の動作を分析するための指標を作成することを目的とし、予備調査を行った。

予備調査では、筆者の知人で、風景構成法を学んだことがない大学生・大学院生5名（女性5名、平均年齢22.2, SD=1.17）に協力を依頼した。第一著者を見守り手、調査協力者を描き手として風景構成法を実施し、その様子をビデオカメラ2台で記録した。得られた映像データについて、ELAN (Max Planck Institute)¹⁾を用いて描き手の動作のコーディングを行った。ELANとは、映像データについて複数の階層に分けて注釈を加えることのできる動画解析ツールである。本研究では、描き手が線描を行う「構成段階」において、見守り手が教示を終え「それでは始めます」と合図した直後から、描き手がなんらかの形で描画終了の合図をするまでの時間を「描画時間」と定義し、描画時間中の描き手の動作のコーディングを行った。コーディングの際は、動作がみられた体の部位ごとに注釈層を分け、描画時間中の描き手の動作を多層的に記録した（図1）。描画時間中の動作のうち、5人の描き手に共通してみられたものをピックアップし、描き手の動作分類表を作成した（表1）。なお、コーディングから動作分類までの一連の作業においては、細馬・菊地（2019）を参照した。

描画時間中の描き手の動作のうち、描き手のペンの動きに注目したところ、ペンの先が画用紙に触れ、実線を描いている状態（線描）、ペンの先が画用紙から離れ、空中で動いている状態（揺動）、ペンの先が画用紙から離れ、空中で止まっている状態（停止）の三つの動作が観察された（図2）。これら三つの動作を、描画そのものに関連する動作として「描画動作」と名付けた。

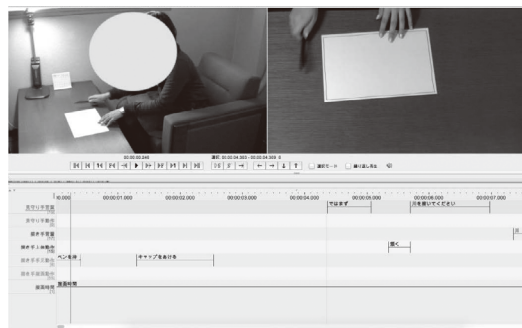


図1 ELANの分析画面

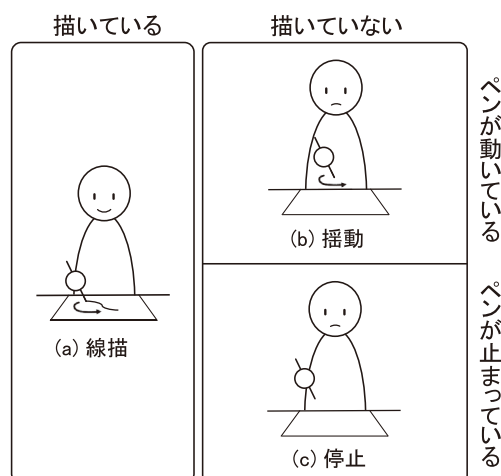


図2 描画動作の分類

表1 動作分類表

部位	名称	定義
上体	上体を起こす	上体を起こし、画用紙から顔を離す。
	画用紙に向かう	上体を紙に近づけ、構える姿勢をとる。
頭部	首をかしげる	首を左右どちらかに傾ける。
	うなずく	首を上下に動かす。
	見守り手を見る	見守り手の方に視線を向ける。
	声を出す	口から音声を発する。
描画動作	線描	ペン先が画用紙に接触している。
	揺動	ペン先が画用紙に接触せず、ペンを持った手が、空中で1秒以上動き続けている。
	停止	ペン先が画用紙に接触せず、ペンを持った手が、空中で1秒以上止まっている。
手元	キャップをあける	ペンのキャップをあける。
描画動作以外	キャップをしめる	ペンのキャップをしめる。
	ペンを置く	ペンを机の上に置く。
	画用紙を隠す	描画していない方の手で画用紙を見守り手の視線からさえる。
	自己接触	自分の体・顔に触れる。

¹⁾ Version 6.2 [Computer software]. (2021). Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics. Retrieved from <https://archive.mpi.nl/tla/elan>

2. 本調査

1) 調査協力者

これまで風景構成法について学んだことがなく、第一著者と面識のないことを条件としてポスター掲示やチラシ配布で調査協力者の募集を行い、参加希望の連絡のあった大学生・大学院生 13 名（女性 8 名、男性 5 名、平均年齢 19.8, SD=1.17）を調査協力者とした。

2) 実施状況

調査は大学院附属の心理相談機関の面接室で行った。室内には、描き手の全身の様子と、描き手の描画中の手元の様子がそれぞれ撮影できるようにビデオカメラを 2 台設置した。

3) 手続き

調査協力者には、調査の様子を録画・録音することを伝えたうえで、個人情報の取り扱いや途中辞退の自由について説明し、同意書への署名を得て調査を開始した。第一著者を見守り手、調査協力者を描き手とし、中井 (1992, pp.238-240) の手順に則って風景構成法を実施した。描画具は A4 サイズの画用紙、黒のサインペン、クレヨン (25 色) を準備した。出来上がった風景に関する話し合い段階を経た後、描き手に描画中の体験について質問を行い、最後に画用紙の裏に署名を促して描画を終了した。

4) 分析方法

① 動画解析

描き手の描画中の映像データ (計 44 分) について、予備調査で得られた動作分類表 (表 1) をもとに動画解析を行い、描き手の動作を分類した。さらに、描き手の動作のうち描画に直接関連する動きである「描画動作」に注目し、それぞれの描き手の描画動作がアイテムごとにどのように変化していくのかについて量的に分析を行った。

② 「難しかったアイテム」についての分析

描き手の描画時の体験についての録音データ (計 174 分) の文字起こしを行った。そのうち、描画中の体験のなかで「負荷」との関連が高く、描き手が意識化しやすいと思われる「難しかったアイテム」について集計を行った。

Ⅲ 結果

1. 動作の分析について

1) 描画時間について

描き手 13 名分の描画時間について中央値・四分位偏差を算出し、横軸に中央値、縦軸に四分位偏差をとって、描画時間の中央値とばらつきを示す散布図を作成した (図 3)。図 3 より、川・山アイテムの中央値と四分位偏差は小さくまとまっており (川：中央値 21.8 秒、四分

位偏差 3.9 秒、山：中央値 20.6 秒、四分位偏差 4.5 秒)、佐々木 (2012)、大場・佐々木 (2015) と同様の結果が得られた。また、中景群である家・木・人アイテムに注目すると、中央値・四分位偏差ともに中程度の範囲内 (家：中央値 27.0 秒、四分位偏差 11.6 秒、木：中央値 27.4 秒、四分位偏差 8.6 秒、人：中央値 30.6 秒、四分位偏差 15.4 秒) におさまっており、大場・佐々木 (2015) の中景群がまとまる傾向にあるという指摘と類似がみられた。さらに、佐々木 (2012) や大場・佐々木 (2015) が示した結果では、花・動物アイテムがまとまる傾向がみられるが、本研究においても花・動物アイテムは中央値・四分位偏差が中程度の範囲内でまとまりがみられた (花：中央値 28.2 秒、四分位偏差 6.9 秒、動物：中央値 31.1 秒、四分位偏差 13.9 秒)。

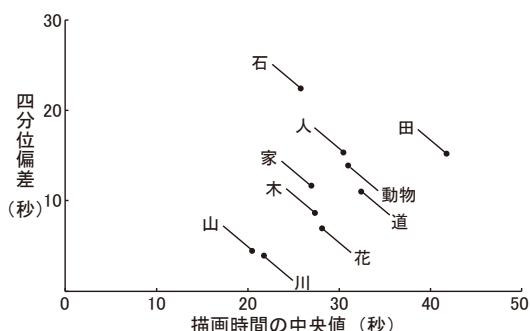


図 3 各アイテムの描画時間の中央値と四分位偏差

2) 各描画動作について

「線描」、「揺動」、「停止」の所要時間の中央値・四分位偏差を算出し、その関係を示す散布図を作成した (図 4, 図 5, 図 6)。さらに、それぞれのアイテムで揺動と停止が出現した描き手の人数を調べ、その出現率を算出したところ、アイテム全体における揺動の出現率は 83.1%, 停止は 46.9% であった。

各描画動作の所要時間の中央値についてみると、線描の所要時間の中央値は大きく、アイテムごとのばらつきも大きいのに対し (線描：5.7-28.6 秒)、揺動と停止の所要時間の中央値は比較的小さい数値でまとまっている (揺動：1.2-5.5 秒、停止：0.0-7.0 秒)。そのため、図 5, 図 6 に示されたデータは図 4 のデータ範囲を拡大したものとなっている。図 4 から、田アイテムは線描の所要時間の中央値が突出して大きいことが分かった (田：中央値 28.6 秒、四分位偏差 8.2 秒)。反対に、川・山アイテムの線描の所要時間の中央値は小さく (川：中央値 9.8 秒、四分位偏差 1.9 秒、山：中央値 5.7 秒、四分位偏差 5.7 秒)、川・山アイテムの線描に費やす時間はごく短い描き手が多いことが分かった。

揺動の出現率は83.1%であることから、揺動は描画中の動作として多くの描き手に共通してみられるものであるといえる。図5より、揺動の所要時間の分布は連続的で、中央値が突出して高いアイテムはみられなかった。反対に、川・山・花・石アイテムは中央値が比較的小さいアイテムとしてまとまりがみられた（川：中央値2.0秒、四分位偏差1.0秒、山：中央値1.2秒、四分位偏差3.1秒、花：中央値1.8秒、四分位偏差1.3秒、石：中央値2.4秒、四分位偏差2.0秒）。

停止の出現率は50%未満となっており、揺動に比べて出現頻度は低い。また、図6をみると、山・田・家・

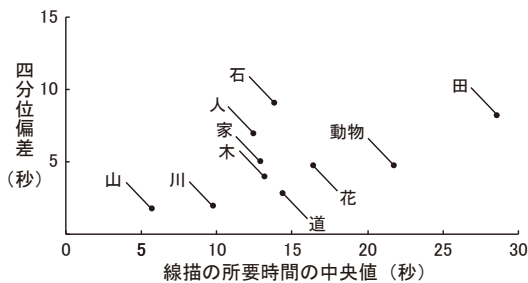


図4 各アイテムの線描の所要時間の中央値と四分位偏差

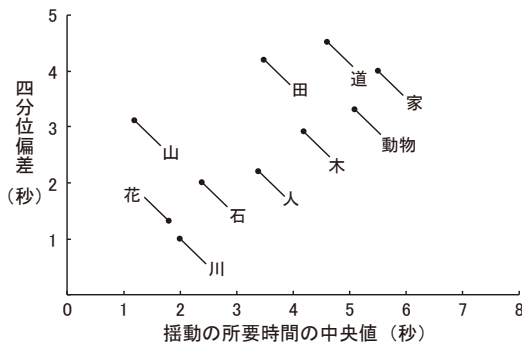


図5 各アイテムの揺動の所要時間の中央値と四分位偏差

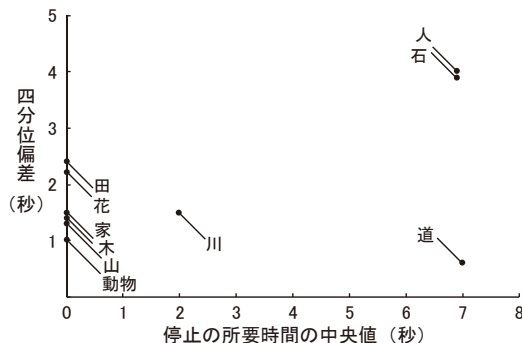


図6 各アイテムの停止の所要時間の中央値と四分位偏差

木・動物・花の半数以上のアイテムで停止の所要時間の中央値が0.0秒となっており、停止が描画中の動作としては出現しづらいものであることが分かる。一方、道・人・石アイテムの停止の所要時間の中央値は約7秒と突出して大きい（道：中央値7.0秒、四分位偏差0.6秒、人：中央値6.9秒、四分位偏差4.0秒、石：中央値6.9秒、四分位偏差3.9秒）。このうち、人・石アイテムは四分位偏差が大きく描き手ごとにばらつきがみられるが、道アイテムは四分位偏差が0.6秒と小さく、多くの描き手が道アイテムで比較的長く停止したことが分かる。

2. 難しかったアイテムについて

難しかったアイテムについて描き手に質問した結果、13名中10名の描き手が難しかったアイテムがあると答えた。難しかったアイテムとして最も多かったアイテムは道アイテムであった。また、描き手が難しかったと答えたアイテムと、各描画動作の描画時間に占める所要時間の割合が最大となったアイテムの関係について調べたところ、10名中6名で「難しかったアイテム」と「停止の所要時間の割合が最大となったアイテム」が一致した（表2）。

表2 各描き手の難しかったアイテムと線描・揺動・停止の割合が最大となったアイテムの関連

描き手	難しかったアイテム	線描の割合が最大となったアイテム	揺動の割合が最大となったアイテム	停止の割合が最大となったアイテム
A	-	田	川	道
B	-	川	道	石
C	田, 道	田	川	道
D	木	田	家	山
E	動物	田	道	人
F	川	動物	人	川
G	田	川	山	石
H	-	田	家	-
I	道	花	山	道
J	道	人	石	道
K	川, 道	道	家	人
L	田, 人, 動物	花	木	人
M	道, 川	田	木	道
難しかったアイテムと一致した数		2	0	6

IV 考察

1. 描画時間について

川・山アイテムの描画時間の中央値と四分位偏差が小さくまとまるという点について、佐々木 (2012) や大場・佐々木 (2015) の示した先行研究と同様の結果が得られた。川・山アイテムは「時間をかけることが難しい」ア

アイテムであるという佐々木 (2012, p.124) の指摘は、描き手に共通してみられる傾向だといえる。また、家・木・人アイテムと花・動物アイテムの描画時間の中央値と四分位偏差の値にまとまりがみられ、佐々木 (2012) や大場・佐々木 (2015) と同様の結果を示した。このことから、田・道・石アイテム以外の川・山アイテム、家・木・人アイテム、花・動物アイテムの描画時間は、中央値と四分位偏差が同程度になりやすいという性質があり、これは見守り手の違いや実施状況にさほど影響を受けることなく一般的にみられる傾向であるといえる。

2. 各描画動作と「負荷」の関連について

近藤 (2016, p.143) が、「描画制作がどのように進展し、どのようにして停止したかには、描き手のイメージ体験そのものが表れているのではないだろうか」と述べているように、描き手の動作には描き手の体験が反映されていると推測できる。描画動作は、「描くためにエネルギーを要する動作」であるため、描き手の描画動作の様相から描き手の「負荷」を読み取ることができると考えられる。今回、動画解析によって分類された「線描」、「揺動」、「停止」は、それぞれ異なる「負荷」を示していると解釈し、以下に考察を行う。

1) 線描

線描とは、描き手が紙の上に実際に線を描いている動作である。線描の所要時間の長さからは、描き手がそのアイテムを表現するのに費やした作業時間をみることができる。線描の所要時間の短いアイテムは、すばやい描線で、シンプルに描画されたアイテムである。反対に線描の所要時間が長いアイテムは、作業量が多く、複雑な表現や手数の多い表現がなされたアイテムであると考えられる。一本の線をゆっくりと時間をかけて描いた場合も線描の所要時間は長くなるが、慎重な、丁寧な描線にはエネルギーが必要であり、作業にかかる負担は高いといえるだろう。以上より、線描の所要時間の長さから、描き手の作業的な労力の高さをはかることができると考えられる。線描の所要時間に反映される描き手の「負荷」を、本論では「作業負荷」と呼ぶこととする。この「作業負荷」は、佐々木 (2012, p.124) の指摘する「伸び伸びと描くことができた」場合にかかる「負荷」に該当すると考えられる。

2) 揺動

揺動は、画用紙からペンを離れたまま手を動かしている状態で、描画中の動作として多くの描き手で観察できた。揺動は、描き手がアイテムについてどのように描くか迷ったり、空中で試し描きをしたりして試行錯誤している状態であると考えられる。この動作は、描き手の心的イメージが形成されてから線描に至るまでの間に起こるものであると推察でき、揺動の所要時間の長短をみる

ことで、描き手のイメージがスムーズに紙面に表出されたか、あるいは表出に手間取ったかを読み取ることができよう。このことから、揺動の所要時間の長さは「イメージ表出の負荷」の高さを表していると考えられる。この「負荷」は、佐々木 (2012, p.124) の述べる「描くの到手間どっている場合」の「負荷」にあたるといえるだろう。

難しかったアイテムと揺動の所要時間の割合が最大になったアイテムとの関連はみられず、「イメージ表出の負荷」は、描き手に意識されにくい「負荷」であると考えられる。また、揺動はどの描き手、どのアイテムでも高頻度で生じていることから、描き手が描画を行う際に出現しやすい動作であるということが分かる。揺動の所要時間が突出して大きいアイテムはみられなかったが、所要時間の中央値が小さいアイテムとして川・山・花・石アイテムが示された。これらのアイテムは、「イメージ表出の負荷」が少ないアイテムといえるだろう。

3) 停止

停止は、描き手が空中で手を止め、思考をめぐらしている状態であると考えられ、描画アイテムについてのイメージを形成している段階で生じるものと思われる。停止の所要時間の長さは、「イメージ形成の負荷」を示しているといえるだろう。この「イメージ形成の負荷」は、石原 (2014) が論じている「指定されたアイテムをどのように描こうか考えたり、イメージしたりする際にかかる負荷」に相当するものであると考えられる。

停止の出現頻度は揺動に比べると低く、停止が全く出現しないアイテムも多くみられた。このことから、停止が生じている状態は、描き手にとってある種特殊な状態であると考えられる。また、停止の割合が最大となったアイテムと、描き手が難しいと感じたアイテムには関連性がみられた。以上のことから、描画中に長い停止が生じている状態は「イメージ形成の負荷」が高くなっている状態であり、その「負荷」は描き手に「困難さ」として意識されやすいものであるといえる。

3. 「負荷」からみたアイテムの特徴

ここからは、風景構成法の10のアイテムのうち、各描画動作の所要時間に特徴のみられた、川・山・田・道・人・花・石アイテムについて取り上げ、三つの「負荷」に注目してアイテムごとに考察を行っていく。

1) 川・山アイテム

風景構成法で最初に提示される川・山アイテムについて、中井 (1970, p.85) は「川の次に山という順序は、わざと構成上の困難を設定するためのものである」と述べている。また、皆藤 (1994, pp.270-282) は、風景構成法におけるアイテム提示順序の影響を調べるために、通常施行型 (N型) およびアイテム自由選択型 (F型)

による風景構成法を実施し、とくに川・山アイテムの描画順序について検討を行っている。こうした先行研究をふまえ、本研究では川・山アイテムについて「負荷」の観点から考察を加える。

今回の結果において、川・山アイテムはどちらも線描と揺動の所要時間が短くなる傾向がみられた。山アイテムは全アイテムの中で線描・揺動の所要時間の中央値が最も小さく、「作業負荷」と「イメージ表出の負荷」が最もかかりにくいアイテムであることが分かる。一方、川アイテムは、山アイテムに比べると線描・揺動の所要時間の中央値が高いものの、アイテム全体でみると低い値を示している。同様に、停止の所要時間の中央値も、山アイテムと比較すると川アイテムの方が高いが、川アイテムの中央値はアイテム全体のなかでは突出して高い値ではない。皆藤（1994, p.279）は、通常施行型（N型）とアイテム自由選択型（F型）による風景構成法を比較し、F型で川よりも山が先に描かれることが多いことや、F型の方が風景の構成得点が高いことから、「川を最初に描くことは描き手の自由な心の動きに、構造上制限を与えたい」と指摘している。今回得られた結果から、川アイテムと山アイテムを比較すると、いずれの「負荷」も川アイテムの方が高く、皆藤（1994）の論を支持しているといえるが、アイテム全体でみると、川アイテムの「負荷」はさほど高くないと考えられる。中井（1992, p.242）は、構成上の困難をもたらす川アイテムを最初アイテムにしたことを「意地悪」と表現しているが、これに対して佐々木（2012, p.124）は、川アイテムの描画時間が短いことを取り上げ、「この『意地悪』は随分とささやかなものであると言えるだろう」と述べている。中井の設定した「意地悪」が「ささやか」なものであることは、川アイテムの「負荷」の低さからも示すことができたといえる。

2) 田アイテム

田アイテムは突出して線描の所要時間の中央値が高く、「作業負荷」のかかりやすいアイテムであるといえる。大場・佐々木（2015）も、田アイテムで「線描時間」が長くなることを指摘しており²⁾、田アイテムの線描の所要時間が長くなることについて再現性が認められる。大場・佐々木（2015, pp.56-57）は、田アイテムについて「ただ四角形を描いた所で田であることは分かりづらく、稲を描くなどといった工夫が求められやすいアイテム」と述べ、山中（1984, p.22）が指摘した、田アイテムと「せねばならぬこと」との関連性に触れながら考察を行っている。「作業負荷」が高くなりやすい田アイテム

の描画を簡素に終わらせるのか、もしくは時間をかけてしっかり描き込むのかという取り組み方に着目することで、山中（1984）の述べる「せねばならぬこと」に向き合う際の描き手の姿勢を汲み取ることができるのではないかと考えられる。

3) 道アイテム

道アイテムは停止の所要時間が長くなりやすく、「イメージ形成の負荷」が高いアイテムであることが示された。この結果は、大場・佐々木（2015）が示した道アイテムの初発時間が大きいという結果を、さらに具体化したものであるといえる。中井（1992, p.242）は、「『道』は空間の各部分を連結する」と述べている。描き手は道アイテム描画時に川・山・田という他の大景群とのつながりを意識する必要があり、こうした空間的配置の難しさ、道としての機能を持たせることの難しさが、風景のなかに道をどのように描くかというイメージの生成を困難にしているのだと思われる。停止の所要時間が道アイテムで長くなる傾向は、多くの描き手に共通してみられた。また、道アイテムは、描き手が最も「困難さ」を感じやすく、その「負荷」が意識に上りやすいアイテムであることが分かった。風景構成法の描画プロセスにおいて、描き手が道アイテムでどの程度停止したか、また道アイテムをどのように表現したかに着目することで、「負荷」がかかったときの反応の仕方や、「困難さ」への対処方法などを見てとることができるだろう。

4) 人アイテム

人アイテムは、HTPテストと同様の要素をもつ中景群の最後にあたるアイテムである。今回の結果から、人アイテムは停止の所要時間が長くなりやすく「イメージ形成の負荷」が高いアイテムであることが示唆された。山中（1984, p.5）は、人アイテムが描き手に拒否されやすく、拒否されなくても小さく描かれたり、線描のみの図式的な表現がなされたりすることを指摘し、「『人』の表現は、それだけ抵抗の強い項目であるようだ」と述べている。三上（1995, pp.36-37）は、統合型HTP法の「人間像」について、「描画技法上、もっとも描きにくい課題であることもあろうが、人間像に自分が投影されてしまうことが被検者にも容易に推測されて、抵抗が起きたり、警戒心が生じたりするためとも考えられる」と述べている。風景構成法の人アイテムについても、こういった自己像の投影に対する抵抗や迷いが、「イメージ形成の負荷」につながっていると思われる。皆藤（2004, p.47）は、人アイテム描画時に描き手が「とまどい、ためらい、逡巡、抵抗」などの想いを抱えていると述べているが、停止という動作にはまさに、こういった描き手の想いが反映されているといえるだろう。

5) 花アイテム

花アイテムは揺動の所要時間が短く、「イメージ表出

²⁾ 大場・佐々木（2015）は、「描き手が画用紙にペン先を置いてからアイテムを描画し終えるまで」の時間を「線描時間」と定義しているため、厳密にいうと本研究の「線描」の所要時間の定義とは異なっている。

の「負荷」が低いアイテムであることが示唆された。これは、伊集院・中井 (1988, p.959) が「花は、人まで描いたあと、少しほっとしてもらの意味あいをもつ」と述べていることと整合する。山中 (1984, p.28) は『「花」は生活の『色どり』であり、『花やかさ』であり、まさに『色を添えるもの』である」と述べている。また皆藤 (2004, pp.47-48) は、人アイテムによって「風景そのもののなかに入り込む動的な姿勢」を余儀なくされたのが、花アイテムで「風景を眺める地平に臨床的位置を引き戻す」ことができると論じている。花アイテムで「ほっと」するのは、山中 (1984) が述べる「花」が本来持つ性質によるものだけでなく、「花」と提示されたときに、描き手がそのイメージを風景にあてはめやすいことも影響していると考えられる。こういったことから、描き手はあまり迷うことなく花アイテムを描画でき、描き手にとってひと息つけるアイテムとなっていると考えられる。

6) 石アイテム

最後の石アイテムは、揺動の所要時間が短く、停止の所要時間が長いという性質をもち、「イメージ表出の負荷」は軽いが、「イメージ形成の負荷」がかりやすいアイテムであることが示唆された。山中 (1984, p.31) が、石は「普通の場合、目立たぬもの、無数にあるもの」であるが、巨石や巨岩として表現されると『「障害」なり『重荷』なり『厳しさ』なりを表すことともなる』と述べているように、石アイテムはその大きさや置く場所によってもつ意味が変わるアイテムになる。風景の締めくくりとして石アイテムをどのように配置し、意味づけをするのか、描き手はそのイメージを生成するのに時間を要するのであろう。揺動の所要時間が短いのは、イメージが固まりさえすれば、迷わずに描けるアイテムであるからだと考えられる。中井 (1984, p.267) は、石アイテムを最後に加えた理由について「こういう重苦しいものも入り用だと思ったから」と説明している。一方で、佐々木 (2012, p.125) は、石アイテムの描画時間が短くなる傾向がみられたことから、石アイテムについて「一連の流れを収めて終わることができるように負荷の低いアイテムが用意されている」と考察している。中井 (1984) の述べる「重苦しさ」は、「イメージ形成の負荷」の高さ、佐々木 (2012) の述べる「負荷の低さ」は「イメージ表出の負荷」の低さとして現れているといえる。

4. 風景構成法の「負荷」の推移

ここからは、「作業負荷」、「イメージ表出の負荷」、「イメージ形成の負荷」が、風景構成法のプロセスにおいてどのように変化していくかについて考察を行う。

まず、それぞれの「負荷」の関係性について論じる。線描は「作業負荷」、揺動は「イメージ表出の負荷」、停止は「イメージ形成の負荷」によって生じていることが

示唆された。これらの「負荷」は、描き手が頭の中でアイテムについて思い浮かべるといった思考やイメージを伴う「内的な作業」から、実際に手を動かし紙に線を描くというような身体運動を伴う「外的な作業」に移行していく過程で、段階的に生じるものであると考えられる。このように、それぞれの「負荷」が描き手の内的な作業から外的な作業に移るまでのどの段階で生じるものであるかという観点でみると、この三つの「負荷」は独立しているものではなく、階層的な構造を成していると捉えることができる。この階層構造について、より内的な「負荷」は下層に、より外的な「負荷」は上層に配置し、「イメージ形成の負荷」を最下層、「イメージ表出の負荷」を中位層、「作業負荷」を最上層として図7に示した。

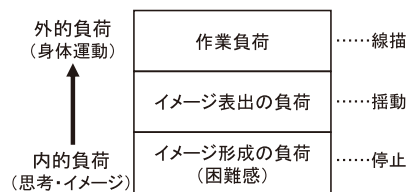


図7 「負荷」の階層構造

次に、それぞれの「負荷」がどのように推移しているのかについて、アイテムの提示順序に沿って検討を加える。川・山アイテムは、「作業負荷」と「イメージ表出の負荷」が低いアイテムである。次に提示される田アイテムでは、「作業負荷」が全体の中で最も高くなる。そして大景群の最後となる道アイテムで、「イメージ形成の負荷」が高まり、多くの描き手に困難感が生じる。続く中景群の家・木アイテムは、どの「負荷」も高くも低くもないアイテムであるが、三番目の人アイテムで「イメージ形成の負荷」が高くなる。最後の近景群 (小景群) は、「イメージ表出の負荷」が低い花アイテムから始まり、動物アイテムがきて、最後に「イメージ表出の負荷」は低い、「イメージ形成の負荷」の高い石アイテムで締めくくられるという構造になっている (図8)。「イメージ形成の負荷」が高く、描き手が「困難さ」を感じやすい道・人・石アイテムは、それぞれ、大景群・中景群・近景群の最後に位置するアイテムである。つまり風景構成法は、さほど困難感の低いアイテムから始まり、最後に困難感の高いアイテムがくるというまとまりを群ごとに繰り返す構造になっているといえる。図8で示したとおり、描き手の「負荷」は多層的であると思われるが、一つの層で「負荷」の高いアイテムが連続することはなく、各層の「負荷」が同時に高くなるアイテムもないことから、風景構成法のこのアイテム提示の構造は、佐々木 (2012, p.125) の述べているように、「描き

手に必要以上の負担感を与えないような順序」になっていると考えられる。瀧川 (1984, p.43) は、実りある面接の場には、ほどよい緊張と緩急が大切であるとし、『風景構成法』のアイテム配列にも、この緩急の工夫がうかがえないだろうか」と述べている。風景構成法の「緩急の工夫」は、描き手の「負荷」の推移の様子から、見てとることができたといえる。

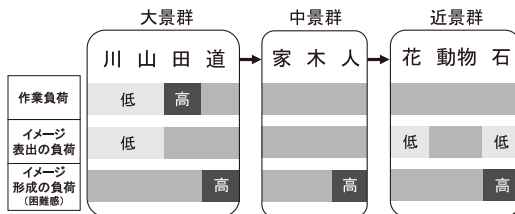


図8 「負荷」の高さからみたアイテム提示順序の構造

5. 描き手の動作からみた風景構成法の「負荷」

本研究では、風景構成法の描き手の動作に着目し、描き手の「負荷」について考察を行った。風景構成法の描画中の描き手の動作に関する研究はこれまで行われていなかったが、本研究で作成した動作分類表によって描き手の動作の分析が可能となり、描き手の動作から描画プロセスを読み取るという新たな視点を提示できたといえる。近藤 (2016, p.143) は、描き手の描画プロセスを「常に一直線に進むのではなく、行ったり来たりしながら、ときに不十分さを感じながらも完成させていく」と表現しているが、本研究で示した「揺動」や「停止」の所要時間には、まさにこの「行ったり来たり」する描き手の複雑な描画プロセスが反映されており、描画動作の所要時間に着目することで、描画プロセスが客観的に説明可能なものとなるのではないかと考える。

また、「作業負荷」「イメージ表出の負荷」「イメージ形成の負荷」の三つの異なる「負荷」のうち、「イメージ形成の負荷」は描き手に「困難さ」として意識されやすい「負荷」であることが示唆された。松下 (2023, p.59) は、描画法を用いた面接場面における描き手や見守り手の心の動きについて「かならずしも意識に上るものばかりでなく、自覚されない無意識的次元のものも含まれる」と述べている。本研究では、描き手の意識に上りやすい「負荷」だけでなく、意識されにくい「負荷」についても検討し、風景構成法の多層的な「負荷」の様相を示すことができたといえるだろう。

本研究は、大学生・大学院生の13名を描き手として調査を行ったが、今後その対象や人数を広げてデータを蓄積し、検討を行うことで、さらなる知見を広げることができると考える。また、松下 (2023, p.68) が述べるように、「描画作品と描画プロセスは切っても切れない

関係」であることから、今後は、描き手の描画動作と完成された描画の関連についても研究を行っていく必要があると思われる。

引用文献

- 細馬宏通・菊地浩平 (2019). ELAN 入門 言語学・行動学からメディア研究まで. ひつじ書房.
- 伊集院清一・中井久夫 (1988). 風景構成法—その未来と方向性. 臨床精神医学, 17(6), 957-967.
- 石原 宏 (2014). 近赤外分光法 (NIRS) を用いた脳活動計測による風景構成法の「川」負荷に関する検討—ヘモグロビン濃度に注目した項目提示順序の検討に向けて—. 佛教大学総合研究所紀要, 21, 225-253.
- 皆藤 章 (1994). 風景構成法—その基礎と実践. 誠信書房.
- 皆藤 章 (2004). 風景構成法のとくと語り. 誠信書房.
- 近藤孝司 (2011). 描画法の描画過程と描画体験に関する一考察. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 11(1), 29-42.
- 近藤孝司 (2016). 描画法の描画過程における主観的体験の検討—バウム法, S-HTPP 法, 風景構成法の描画過程の比較—. 上越教育大学研究紀要, 35, 135-146.
- 久保田新 (2006). 運動・動作・行動の流れの中の「意志」と意識—状況理論に向けて—. 理学療法学, 33(4), pp.199-201.
- 松下姫歌 (2023). 施行手順と体験過程. 皆藤 章・浅田剛正 (編). 風景構成法の現在. 誠信書房, pp.43-72.
- 三上直子 (1995). S-HTP 法—統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ. 精神書房.
- 長岡千賀・佐々木玲仁・小森政嗣・金 文子・石丸綾子 (2013). 行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討—描画法施行場面を題材として—. 対人社会心理学研究, 13, 31-40.
- 中井久夫 (1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—特に技法の開発によって作られた知見について—. 芸術療法, 77-90.
- 中井久夫 (1984). 風景構成法と私. 山中康裕 (編). 中井久夫著作集別巻 1 H.NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 37-72.
- 中井久夫 (1992). 風景構成法. 精神科治療学, 7(3), 237-248.
- 野中哲士・西崎実穂・佐々木正人 (2010). デッサンのダイナミクス. 認知科学, 17(4), 691-712.
- 大場 麗・佐々木玲仁 (2015). 描画時間からみた風景構成法アイテムの特徴. 九州大学心理学研究, 16,

51-58.

佐々木玲仁 (2006). 風景構成法の文献展望. 京都大学大学院教育学研究紀要 第 52 号, 187-198.

佐々木玲仁 (2012). 風景構成法のしくみ—心理臨床の実践知を言葉にする. 創元社.

高橋正樹 (2012). 映像解析による人物動作理解に関する研究. 総合研究大学院大学複合科学研究科博士論文.

文.

滝川一広 (1984). 日常臨床の中の「風景構成法」. 山中康裕 (編). 中井久夫著作集別巻 1 H.NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 37-72.

山中康裕 (1984). 「風景構成法」事始め. 山中康裕 (編). 中井久夫著作集別巻 1 H.NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, pp.1-36.